

## 日本の大学における TOEIC 指導の課題 その I

### Problems Related to TOEIC Instruction in Japanese Universities Part I

内海 俊祐<sup>\*)</sup>

Shunsuke Uchiumi

**要旨**：本稿では、国内の大学で TOEIC の指導が盛んに行われているという現状を踏まえ、どのような理由で日本の大学あるいは企業に TOEIC がかくも人気があるのかということ考察した。そのうえで、TOEIC 指導を行う場合に問題となるいくつかの事柄を指摘し、日本人の英語運用能力の特徴を踏まえたうえで、その向上のために TOEIC を有効利用する方法論を提言として示した。

**Key Words** : TOEIC 英語教育 国際化

#### 1. 序

拙論で以下二回に分けて意見として述べる事柄は、現在大学その他の機関で TOEIC 関連の英語教育に関わっている方々にはそのほとんどが旧知でありすこぶる自明のことかもしれない。筆者が本務校で TOEIC の指導を初めて 10 年以上が経過したが、この間他大学でも TOEIC 関連の科目を同時進行的に担当し、TOEIC 指導を通してどのようにしたら学生の英語の力を伸ばすことができるか、あるいはどうしたら英語学習をもっと面白くすることができるのかということ自分なりに常に考えてきたつもりである。TOEIC の問題を分析したり、TOEIC を実際に自ら受験したりすることによって、指導する者として今では学生に対して TOEIC の問題の効果的な解答法を十分提供することができるかと自負しているが、今回はそのような受験勉強的な実用面での事柄ではなく、この英語の試験そのものが授業を受け持つ立場の自分自身の教育観総体の中でどのような意義を持つのかという問題をあらためて整理しておきたいと思い、これまで自分が TOEIC に関して考えてきた事をまとめ、二回の発表に分けて文章化することにした。

TOEIC 指導が日本の大学の英語教育に占める時

間的割合は、今では大変高いものになっている。TOEIC が日本で実施されるようになったのは 1979 年の公開テスト実施以来であるから、<sup>1)</sup> それから 30 年以上にわたって日本の大学は徐々にこの英語検定試験を学生の英語力の向上のために利用するようになってきたことになる。現在では、大学での TOEIC 指導は、通常の英語の授業の中で TOEIC の問題を演習問題形式に使用しそれを解説してゆく類の授業形態だけを意味するのではない。TOEIC 指導の範疇には、例えばインターネット上で受講生の学習状況を把握しそのデータを管理しつつ、TOEIC 対策の演習問題をリスニング問題の音声も再生できるようなプログラムを使って一定期間内に一定量を授業時以外で課したり、課外授業あるいは補習のような形で TOEIC 問題の解答法いわゆるコツを英語担当者が学生に伝授したりするような、それこそ受験対策講座並みの指導も含まれる。このような指導の下で、学生に対して一般公開の TOEIC 受験が指導の一環として大いに薦められることはまったく当たり前のことであるし、学生のスコアをより厳格に管理し有効活用するためにわざわざ各校独自の団体テスト (IP テスト) をキャンパス内で実施する大学も多く見られるのも当然のことである。さらに、学生に対して TOEIC 受験を

<sup>\*)</sup> 宇部フロンティア大学人間社会学部福祉心理学科教授

義務づけ、一定のスコアを得なければ卒業が認められないように設定されたカリキュラムを有する大学も存在することさえ驚きには当たらないように思われる。

TOEIC 指導に重点を置くようになった国内大学の現行の英語教育の下では、学生は自ら好むと好まざるとにかかわらず TOEIC 受験を想定あるいは前提とした英語学習に一定の時間専念せざるを得ない。本来一定の目標を明確に設定して、学生にそれを持続的に意識させながら学習にあたらせることはシラバスの観点からも方法論としては効果的なことであると思われる。しかしながら、日本の教育界で度々指摘されてきたように、過度な点数主義は知識の量では決して測ることのできない創造性その他の知的能力を学ぶ者から奪うことになりうるという問題も生じるかもしれない。TOEIC の場合も一定の明確な基準（例えば 400 点）を設けて、それを目標に英語学習を行うことは確実に効果のあることではあるが、今回あえてそれに関わる問題を TOEIC 指導に携わってきた者として指摘したいと思う。したがって、本稿では主に現行の TOEIC 指導と日本人の英語運用能力の関係を論じつつ、日本の英語教育の問題点とそれに対する大まかな対応策を私見として述べることになる。

## 2. TOEIC 指導の現状と問題点

### 2-1 英語教育における TOEIC の有効性

現在、受験者がインターネットのサイトや書店などを通して申し込んで受験する TOEIC の公開テストには、TOEIC® 公開テストと TOEIC® SW 公開テストおよび TOEIC Bridge® 公開テストの以上 3 種類がある。これらの中で、TOEIC® SW 公開テストはスピーキングとライティングの能力を測るために特化したテストであり、TOEIC Bridge® 公開テストは英語問題を中学・高校生にも内容的に適当と思われる程度のレベルに設定したテストである。通常我々が TOEIC と言うとき、それはリスニング 100 問とリーディング 100 問の計 200 問で構成されていて、スコアが受験者の正解率により 5 点刻みで 10 点から最高点の 990 点までの一種の偏差値で表される TOEIC® 公開テストを一般的には指す。TOEIC® 公開テストは日本で現在年間 10 回行われているが、大学や企業はこのテストの受験を積極的に学生や社員に薦めているし、すでに述べたように、独自に IP テストを実施する団体も多い。日本の英語教育における TOEIC の有効性を考えた場合、内容以

前にその運用面で大きなメリットがこの試験にはあり、それが高い人気につながっていると筆者は考える。以下、まず TOEIC の人気が高い理由をその運用面で考えてみることにする。

運用面における TOEIC の人気の第一の理由としては、この試験の受験者のスコアが各人の英語の実力を測る尺度として非常に利用しやすいことが挙げられる。これは、英語教育における TOEIC の有効性を評価する場合、この試験の最大の利点だと思われる。日本英語検定協会が実施している実用英語技能検定（いわゆる英検）を TOEIC® 公開テストと比較した場合、英検が 2 級や準 1 級などの級を設定していて、級ごとに試験問題が異なるのに対して、TOEIC の公開テストでは全受験者が一斉に同一問題を解くシステムになっている。TOEIC はビジネス英語を多く含んでおり、このことにより当然 TOEIC の問題はこの分野の英語に不慣れな受験者にとっては過度に難しいものになり、英検のように自分の実力に合ったレベルの英語の問題を解くという選択の自由がない。しかしながら、学生の英語運用能力を把握する立場から言って、一種の偏差値で受験者の英語の能力を一元的に評価できるようになっているという点で TOEIC の方が英検よりもより利便性が高いと考えられる。すなわち、例えば英検では複数の受験者の能力を単純に比較することは表面上できないが、TOEIC では受験者のスコアによってそれが簡単明瞭にできるからである。

TOEIC の人気の第二の理由として、大学や企業が団体受験の制度を利用する場合、TOEIC は試験実施に関する制限がより少なく、団体側にとって利便性が高いことが挙げられる。準会場における団体受験制度が英検にあるように、TOEIC にも各大学や企業などの団体がまとまった人数の受験者を集めて申込み、独自に試験の場所と日時を設定して開催する IP テストがある。団体ごとの試験実施が可能であるという試験実施機関にとっての利便性を考慮すれば、各団体が全く独立して試験を実施できる点で、実施日時に関しては各団体が任意に日時を設定することができない英検の準会場における団体受験と比べると、TOEIC の IP テストは大学や企業などの団体側により便利な条件で設定された試験であると言う事ができよう。

次に、試験問題の内容面での TOEIC の有効性を観てみることにする。TOEIC の解答方法は A ~ D あるいは A ~ C の選択肢から答えを選んでマークシートに記入する方式になっている。4 択か 3 択問題のマークシート方式であるがゆえに、解答者は問

題内容を部分的に理解するだけで正解をかなりの高い確率で導き出すことができる。これを例えば英文和訳問題と比較すると、和訳問題の場合はセンテンスの意味が完全に把握できなければ正しい訳は受験者には書けないだろうが、マークシート方式の場合は、例えばリスニングの Part2 の応答問題の場合、時や場所を表す疑問詞を使った疑問文に対しては同じく時や場所を表す副詞あるいは副詞句を含んだセンテンスを選択することに集中すれば正答が得られる場合が多い。TOEIC の問題は 2006 年 5 月から現在に至るまで問題数および形式がずっと固定していて、<sup>2)</sup> リスニング問題とリーディング問題をそれぞれ 45 分と 75 分の計 2 時間で解答するようになっているが、この時間的制約のもとで受験者はかなりの英語の量と格闘しなければならない。TOEIC においては、解答者には大量の文字情報を要領よく把握し迅速に処理する能力が要求されており、特に最後のリーディングのセクションである Part 7 ではかなりのスピードで英文を読み、時にはスキミングなどの読みの技術を使うことによって問題を効率的に解いてゆく必要がある。これは、昔の訳読式の英語の指導では到底身につかない英語の運用能力であり、TOEIC 指導の隆盛は沈思熟考型の英語の読み方をすでに過去のものにした感がある。インターネットの出現と普及によって我々は以前と比べて圧倒的に膨大な量の情報に日々さらされて生活していると言われていたが、そのような情報の渦の中で自分が必要とする重要な部分を選択処理する能力は、まさに現代社会が要求するものである。この意味で、TOEIC の問題内容は時代のニーズを的確に満たしていると言えよう。

TOEFL が英語圏の大学で留學生活を営むための英語の能力の有無を効果的に測る試験であるのと同様に、TOEIC も英語圏で英語を使いながら経済活動をしてゆく能力、例えばアメリカに赴任したビジネスマンが現地のコミュニティーで生活しつつ、現地にある会社で英語を使いながら仕事をするといったことができるかを言語の運用面から測ることに特化した試験である。これらを考慮すれば、大学生は TOEIC ではなく TOEFL の方を受験すべきだということになるが、それも確かに正論であり、現在の TOEIC 偏重の傾向から将来的には TOEFL の方に日本の英語指導がシフトしてゆくこ

とも十分考えられる。しかしながら、すでに述べたように運用面で英語の検定試験としては TOEIC に利があるのが現状であり、TOEFL の受験料が高額（日本での受験は 2 万円以上必要）であることも TOEIC の優位を許す原因になっている。また、確かに、企業で働く人々にとって TOEIC は適当な試験であるがビジネスの経験がない大学生にとって TOEIC は不利だという見方も成立する。しかしながら、TOEIC において例えばダウ・ジョーンズ・インデックスに関する文章が出題されていたとしても、それがニューヨーク株式市場に関する記事であるということは株式投資未経験の大学生でも「常識」として知っておかなければならないと筆者は考える。また、仮に日本人が普通使わない小切手の書式を題材にした問題があったとしても、小切手が欧米では一般市民でも頻繁に使う場合があることを外国事情に関する「教養」の範疇の事柄として知っていた方が望ましいのではないだろうか。このような常識や教養をひっくるめた TOEIC 関連の英語は、明治以来西洋文化を取り入れる過程で正確に英文を日本語に翻訳することを主眼に英語を学んできた日本人の英語とは異質のものであって、TOEIC 指導を通じてもっと「使える英語」の方向に舵を取り続ける必要があると考えられる。

(以下、「日本の大学における TOEIC 指導の課題 そのⅡ」の 2-2 TOEIC と日本人の英語能力に続く。)

#### 注

1) 国際ビジネスコミュニケーション協会の沿革を参照。

URL: <http://www.toeic.or.jp/iibc/about/history.html>

2) 2004 年まではリーディングのセクションにセンテンスの中の間違いを選ぶ誤文訂正問題 (Error Recognition) があった。Error Recognition は文章を書くときに必要とされる能力を評価するための問題形式でもあるが、これがこの年 5 月実施の第 122 回公開テストからなくなって、現在の TOEIC には英作文の能力を測る問題は含まれていないと言える。また、この回からのリスニングのセクションにおいて、従来のアメリカのアクセント以外に、イギリス、カナダおよびオーストラリアのアクセントが加わるようになり今日に至っている。